The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カラコルム出土1348年漢蒙碑文―嶺北省右丞郎中總管收糧記―
Author(s)	松川, 節
Citation	内陸アジア言語の研究. 1997, 12, p. 83-98
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/20743
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

カラコルム出土1348年漢蒙碑文
―嶺北省右丞郎中總管收糧記―

松川　節

はじめに

モンゴル帝国の首都カラコルム Qara Qorum は，1260年，第5代カーン・クビライ Qubilai の大元ウルスの成立とともに，帝国の中心としての地位を大都・上都にゆずり，モンゴリアにおける中心的要塞都市となった．1368年にモンゴルが北帰してからもしばらくのあいだ，カラコルムはモンゴリアにおける中心都市であり続けたが，次第に衰え，1585年，当地にチベット式仏教寺院エルデニ・ゾー Erdeni juu が建立されたときには，すでに廃墟となっていた模様である．

カラコルム遺蹟には，当時の栄華を物語る様々な石刻史料が現在に至るまで残されている．中でも，19世紀末にロシアのラドロフ Radloff 探検隊によって発見された漢蒙碑文『勅賜興元閣碑』(至正丙戌；1346年) は，カラコルム城建設の歴史を物語る重要な史料として学界の注目を集めた．今回取り上げる碑文は，同じくラドロフ探検隊によって発見された漢蒙碑文『嶺北省右丞郎中總管收糧記』(至正戊子；1348年) であり，碑陽が漢文22行とウイグル字モンゴル文5行，碑陰は漢文 (磨耗によりほとんど読みとれない) とウイグル字モンゴル文4行から成る．本稿で扱う碑陰のモンゴル文は，今までまったく解読が発表されていないものである．

1．先行研究

本碑文の存在は，上述のラドロフ探検隊がその成果を1892-99年に『古代モンゴリア遺蹟地図』として出版し，拓影を発表したときから学界に知られている．(1)

(1) Radloff 1892-99, plate XLV, fig. 1-2.

ラドロフは，この碑文を「エルデニ・ゾー内，ゴルバン・ゾー【Ґurban juu】堂宇の前方にある大石碑上の漢文銘文」と説明するが，[2] 内容については漢文であること以外，言及していない．

本碑の内容を最初に明らかにしたのは，李文田（撰）『和林金石録』（1897年）である．[3] 李文田は碑陽の漢文を著録したに止まったが，羅振玉はさらにラドロフの拓影及び自ら蒐集した拓本と対校し，詳細な校勘記を1929年に完成させた．[4] その校勘記によると，碑陽については，漢文の後に蒙古字五行が記されていることを明らかにし，碑陰については，チベット文字が刻されており，その内容は碑陽と関連しないため，明代にモンゴル人仏僧が仏呪を刻したにすぎないであろうとしたが，碑陰の漢文とモンゴル文の存在には言及しなかった．

この間，コトヴィッチ Котвич とポッペ Поппе が現地調査の際に当碑文の存在を確認している．しかし，その内容については，コトヴィッチが「ゴルバン・ゾー堂宇の前方 —— より正確にはツァニト堂宇の近く —— に建つ漢文碑文の両面に数行のモンゴル文テキストが認められた… 漢文碑文上のモンゴル語銘文は，充分良好に保存されているが，その内容は，大部分漢語の音写であり，ただ官職名を示しているだけで，漢文で記された内容を意味するにすぎない．モンゴル語の部分は，ほんの数個の単語からなっているだけである」とし，[5] ポッペは「漢文碑文．この碑文中若干行は古代蒙古の書体で書かれ，漢文碑文中にある諸固有名詞の音写である」と説明して，[6] モンゴル文テキストの存在には言

(2) See Radloff 1892-99, Inhaltsverzeichniss.

(3) 百部叢書集成第79，靈鵝閣叢書所収本．臺北藝文印書館．

(4) 李文田（撰）羅振玉（校定）「和林金石録」．石刻史料新編・第2輯第15冊所収．

(5) Котвичъ 1918, pp. 206-208. コトヴィッチは，論文中で言及される2カ所で，共に当碑文をラドロフ拓影の XLVI とする，see Котвичъ 1918, pp. 206, 207. しかしこれは単純な誤解であり，XLV とするのが正しい．ラドロフ拓影の XLVI は『和林兵馬劉公去思碑』の碑陽・碑陰両面であり，拓影による限り，モンゴル文字は一切記されていない．現在，エルデニ・ゾー院内で『嶺北省右丞郎中總管收糧記』碑と並んで放置されているのが，この『和林兵馬劉公去思碑』である．その録文は，李文田(撰) 羅振玉(校定)『和林金石録』14b-17b (pp. 11470-11472) 参照．

(6) Поппе 1929. なお，この論文は筆者未見のため，引用には邦訳（ポッペ 1942, pp. 17, 32）を利用した．

及するものの，解読するだけの必要性を見いださなかったのであった．

ところで，ラドロフが1892年に発表した拓影によると，この碑文には，碑陽の末尾に5行のウイグル字モンゴル文，碑陰上部に数行のウイグル字モンゴル文が存在することがわかる．これらモンゴル文については，ハンガリーのモンゴル学者リゲティ Ligeti によって，1972年に初めて転写録文が発表された[(7)]．転写に付されたリゲティの解題は以下のとおりである．

> 漢文テキストによると，この碑文は，嶺北（モンゴル語転写は Lingbui; カラコルムに比定される）省の右丞・郎中・総管から出された小麦を集めることに関わる．モンゴル語の5行は，漢文22行のすぐあとに位置する．碑石の裏面にはもっと長いモンゴル語テキストがあるはずであるが，写真に基づくと，確信を持って判読できるのは Temüge の名前だけである．碑文の年代は，漢文テキストによると，1348年である．

リゲティがテキストを起こしたのは碑陽のモンゴル文のみであった．また，リゲティは，参照文献として，Kara, G., "Inscription sino-mongole de Qara-qorum de 1348." *AOH* 25 を挙げているが，カラの論文は当該雑誌には発表されておらず，また管見の限り，現在までいかなる形でも公表されていない．

2．研究経緯

筆者が本碑に注目したのは，京都の立命館大学図書館に所蔵されているその碑陰拓本を1991年に閲覧したときからであった．拓本の右下欄外に「和林倉碑 庚戌夏日 三多 識」と記されてあるため，この拓本は清朝最後の庫倫（クーロン）辦事大臣であった三多（サンドー）が，庚戌年，すなわち1910年の夏に採拓させたものであることがわかる．ラドロフの拓影を見ても，立命館大学所蔵拓本を実見しても，碑陰の磨耗は相当進行している．立命館大学所蔵拓本を仔細に調べた結果，碑陰上部に見られるモンゴル文が全部で4行であり，どの行も比較的短いことと，碑陰の中・下部にわたって漢文複数行が存在し，第1行に「北京道糧谷立

---

(7) Ligeti 1972, p. 27. なお，ここでリゲティが本碑をラドロフ拓影の "planche XIV" とするのは，"planche XLV" の誤植である．

石題名」とあることを確認できたが，それ以下を著録することは著しく困難であった．

1996年夏より，文部省海外科学研究費による日本・モンゴル共同研究「突厥・ウイグル・モンゴル帝国時代の碑文及び遺蹟に関する歴史学・文献学的調査（略称：ビチェース・プロジェクト Bichees Project）」（研究代表者：森安孝夫大阪大学教授）が3年計画で開始された．これに先だち，予備調査が1994年8月に行なわれ，筆者はカラコルムを訪れて，現地で本碑石を探索する機会に恵まれた．

エルデニ・ゾー寺院は，カラコルム遺蹟の南部につくられており，104基のストゥーパを持つ城壁によって取り囲まれている．東西南北にそれぞれ門があり，現在は南門が参拝者や観光客用出入口になっている．院内には複数の堂宇があり，南面を原則とするモンゴルの仏教寺院としては珍しく，それらはすべて東面している．ラドロフの報告に基づいて，ゴルバン・ゾー堂宇前方（＝東方）の草むらを探索すると，ほどなく2つの碑石が発見された．そのうちの1碑が，目指す漢蒙碑文であった．院内全体の配置から見ると，碑石は東北部分に横たわっていることになる．

碑石は碑陰を上にして横たわっており，碑陽を見るために動かすことは人力ではまったくできない．碑陰の状態は想像以上に悪く，写真にはまったく写らず，眼視でも文字の判別が困難なほどである．予備調査の段階では採拓許可を取っておらず，時間的制約もあったので，かろうじて眼視でモンゴル文4行のうち最初の3行を筆写するに止まった．

1996年の科研本調査初年度，8月23～24日に再びカラコルムのエルデニ・ゾー寺院を訪れ，本碑文を調査した．碑石は2年前の予備調査時と同じ状態で碑陰を上にして横たわっており，やはり碑陽を見ることはまったくできなかった．そこで今回は，眼視で確認できない部分を解読するためにモンゴル文の部分を採拓した．

調査の最大の成果は，新たに採拓することによって，碑陰のモンゴル文4行を完全に解読できたことである．なお，碑陰中・下部の右半分にわたって刻されている漢文を精査したところ，眼視でも100文字以上の存在を確認できたが，磨

耗が激しく採拓・著録に著しい困難を伴った．それゆえ，本稿では碑陰のモンゴル文4行の解読を主とし，碑陰漢文の解読は今後の課題とする．また，目睹し得なかった碑陽については，ラドロフ発表拓影からの著録と簡単な註釈を付するに止め，歴史史料としての本碑の総合的研究は，碑陽を実見してから行なうこととしたい．

3．碑石の状態

現地で実見したところ，碑石は一枚石で，碑頂の両端が丸く削られた碑首一体タイプである．上を向いている碑陰側で，長さ234㎝，幅85㎝，厚さ27㎝であった．下になっている碑陽側は長さが10㎝長く，244㎝ある．碑石基部には亀趺或いは基台に差込むためのソケットが突出ており，途中で折れたあとが見て取れる．現存するソケットは，長さ12㎝，幅29㎝，厚さが19㎝であった．

立命館大学図書館所蔵の碑陰拓本を測ると，長さ233㎝，幅85㎝あり，現地での計測結果とほぼ一致する．これに対してラドロフ拓影は，碑陰の下三分の一が欠けていることに留意すべきである．

碑陰のモンゴル文は，碑石の中央，碑頂から12㎝～60㎝の部分に行間6㎝で4行記されている．碑頂から60㎝以下，最下部に到るまでは全幅にわたって漢文が刻されていたと思われるが，先述のとおり，全体に磨耗が激しく，左半分には文字の痕跡すら残っていない．碑頂から120㎝～180㎝の部分には，羅振玉が『和林金石録』校勘記で指摘するとおり，チベット文字の仏呪 oṃ mani padme hūṃ が3行にわたって刻されており，その下に刻されていたはずの漢文を解読することは，かなり困難である．チベット文字の仏呪を刻する際に，意図して碑面を削ったのであろうか．また，付近に亀趺ないし基台は見あたらなかった．

4．モンゴル語資料としての特徴

本碑は13～14世紀モンゴル支配時代のモンゴル語資料のなかで，14世紀前半～中葉の順帝トゴンテムル Toγontemür 治世（1333-1370）下につくられた一連

の漢蒙対訳碑のグループに含まれる．このグループに含まれる漢蒙対訳碑としては，(1)『皇元敕賜故贈榮祿大夫遼陽等處行中書省平章政事柱國追封薊國公張氏先塋之碑』(元統三(＝至元元)年乙亥；1335年)，(2)『大元敕賜故中順大夫諸色人匠都總管府達魯花赤竹君之碑』(至元四年戊寅；1338年)，(3)『大元敕賜追封西寧王忻都公神道碑銘』(至正二十二年壬寅；1362年)といった紀功・神道碑や，先述の(4)『敕賜興元閣碑』(至正丙戌；1346年)が知られており[8]，その特徴は，漢文で起草された本文に対してウイグル字モンゴル文によるその対訳が表裏合璧のかたちで付されていることである．もっとも本碑の場合この条件に合致するのは，碑陽の漢文による碑額「嶺北省右丞郎中總管收糧記」が，碑陰の碑額位置にウイグル字モンゴル文で対訳され，記されている点だけであり，碑陽末尾5行のウイグル字モンゴル文については，碑陽漢文のダイジェストとともに，漢文部分には存在しない新たな内容も含んでいるため，別形式とみなすべきだろう．この点で，本碑と同じ1348年に成立した『應理州重修廨用碑銘記』[9]は，漢文末尾にウイグル字モンゴル文2行が刻され，その内容が漢文本文の対訳ではないことから，本碑碑陽と同じ形式と言えるかもしれない．しかし，むしろここで指摘したいのは，このような漢文文書の末尾に漢字漢文以外の文字と言語(ウイグル字モンゴル文・パスパ字モンゴル文・ウイグル字ウイグル文・アラビア字ペルシア文など)で1行～3行添え書きするという形式が，「濟源十方大紫微宮懿旨碑」(庚子；1240年)を皮切りに，本碑の碑陽に到るまで，モンゴル支配時代を通して存在していた可能性である[10]．

書体上の特徴

本碑のウイグル字モンゴル文は，「14世紀ウイグル字碑文体」と称すべきウイグル字体で刻されている．

---

(8) これらの漢蒙対訳碑は，クリーブスによって詳しく研究された，see Cleaves 1949 [=(3)], 1950 [=(1)], 1951 [=(2)], 1952 [=(4)].

(9) Cleaves 1967.

(10) See 中村・松川 1993, p. 25, n. 62.

モンゴル人がウイグル字を借用してモンゴル語を記し始めた13世紀前半において，ウイグル語を記すウイグル字の手写体は，半楷書体から草書体への移行段階にあり，この両者を折衷した半草書体が見られていた.[11] 13世紀のモンゴル人は，まさにこの半草書体ウイグル字を借用してモンゴル語を表記し始めたのであり，13世紀のウイグル字モンゴル語資料は，原文書・碑刻を問わず，等しく半草書体で書かれている．その特徴は，aleph (’), taw (T), waw (W), pe (P), kaph (K) といった文字素 grapheme に見られる右下がりのベクトルが程良く保たれ，語末の aleph (’), nun (N) の直線部分に丸みが残っている点にある．これに対して，14世紀のウイグル字モンゴル語資料は，手写本と碑刻という残存形態によって，書体が截然と分れるようになる．手写本では，上述の半草書体における右下がりのベクトルがほとんど消滅して草書体となり，碑刻では，半草書体における語末の aleph (’), nun (N) の丸みがなくなり，ほぼ直線となって，全体として下方向に引き伸ばされた形になる．

この14世紀の写本と碑刻の書体は，それぞれ，ウイグル語資料を見てもモンゴル語資料を見ても極めて画一的であり，言語的特徴を抜きにして書体だけを問題にした場合，どちらの言語で書かれているのか判別が困難なほどである．筆者が「14世紀ウイグル字碑文体」[12]と称する所以はここにある．

5．碑陰 (verso) モンゴル文テキスト (see Pl. XI)

v01 LYK PWY SYNK-WN
Ling-bui šing-un
嶺 北 省 の

(11) ウイグル字ウイグル語の書体の分類と，それによる時代判定については，森安 1994, pp. 66-67 を参照.

(12) モンゴル語の例として，先述の漢蒙対訳碑4点及び本碑などがあり，ウイグル語の例としては，『重修文殊寺碑』(1326年)，『亦都護高昌王世勲碑』(1334年)，『居庸關六體合璧造塔功徳記碑』(1345年) が挙げられる.

v02	YYW CYNK	T'MWK'	L'NK CWK	Y'NKKY
	yiu-čing	Temüge	lang-čung	J̌anggi
	右 丞	テムゲ	郎 中	ジャンギ

v03	SWNKKWN	MWS'βYR	NWY'T-T'N	XWW CWK
	sunggon	Musavir	noyad-tan	qoo-čung
	総管	ムサヴィル	ノヤンたち が	和 中

v04	"MWN XWRYY'XS'N-W	TWL'	PYY	T'S	P'YYXWLP'
	amun quriyaγsan-u	tula	bii	tas	bayiγulba
	糧 を 集 め た	ために	碑	石 を	建てた.

語註

◆ v01 : Ling-bui šing

漢字「嶺北省」の音写．碑陰モンゴル文の内容が，碑陽漢文の碑名「嶺北省右丞郎中總管收糧記」の対訳であることに気づけば，固有名詞の比定は容易である．Ling-bui は漢蒙対訳碑 (1), l. 13 に在証済み（そこでは LYNK PWY）.[13] ただし本処の綴り字 LYK PWY は注目に値する．同じ単語が本碑碑陽の3行目では，LYNKPWY と綴られており，「嶺」字の音写形として LYK と LYNK の並存が在証されるからである．そこで本碑において，鼻音韻尾 -/ng/ を持つ漢字の音写形を精査すると，以下の結果を得た．v01: LYK Li(n)g「嶺」; v01: SYNK šing「省」; v02: CYNK čing「丞」; v02: L'NK lang「郎」; v02: CWK ču(n)g「中」; v03: SWNKKWN sunggon「総管」; v03: CWK ču(n)g「中」; r02: NYK Ni(n)g「寧」[14]; r03: CYNK čing「政」; r03: LYNKPWY Lingbui「嶺北」; r03: SYNKWN šingun「省の」; r03: CYK či(n)g「丞」; r04: L'NKCWK langču(n)g「郎中」; r05: NYK ni(n)g「寧」; r05: SWNKKWN sunggon「総管」; r05: XWCWK qoču(n)g「和中」.

「嶺」が LYK, LYNK と二様に書かれるのは，「嶺北」を分かち書きにするか

(13) See Cleaves 1950, p. 112, n. 63.

(14) 新たに Ni(n)g と読んで「寧」に比定することについては後述する.

否かという環境の違いがあるので措くとしても，「丞」が CYNK, CYK と二様に書かれるところから見ると，これらのウイグル字綴りは，当時のモンゴル人が中原音を取り入れ，実際に使用していた際の現実を反映しているように思われる．同様の現象として，同時代の半草書体及び草書体ウイグル字ウイグル語において，語末の -NK がしばしば -K と表記される点が指摘できるが，その理由が言語事実の反映なのか，単なる「書きぐせ」であるのかはまだわかっていない．この現象は，ハミルトン Hamilton が指摘したように，10世紀の敦煌出土ウイグル字ウイグル語文書において早くも見られていた[15]．いずれにせよ，本現象は，(パスパ字や漢字だけでなく)ウイグル字で書かれた13～14世紀の先古典期モンゴル文語資料もが，当時の中期モンゴル語の言語事実を反映していた，という筆者の主張[16]にとって新たな検討材料となるものである．

šing「省」は漢蒙対訳碑 (3), l. 2 に在証済み[17]．

「嶺北省」については，『元史』巻24，仁宗本紀1，皇慶元年【1312年】二月甲戌の条に，「和林省を改めて嶺北省と爲す」とあり[18]，巻58，地理志10，「嶺北等處行中書省統和寧路總管府」以下，カラコルムの行政管轄が述べられるなかに，「皇慶元年，嶺北等處行中書省に改め，和林路總管府を改めて和寧路總管府と爲す」とある[19]．

◆ v02-03 : yiu-čing Temüge lang-čung J̌anggi sunggon Musavir

yiu-čing「右丞」，lang-čung「郎中」，sunggon「總管」については，既に漢蒙対訳碑 (3), ll. 2, 32, 37 にそれぞれ在証済み[20]．一方，Temüge, J̌anggi, Musavir 三者については，碑陽漢文中にそれぞれ「資政大夫右丞帖木□」(第8行)，「□□□□□□□□吉」(第8行)，「嘉議大夫和寧路總管木薩飛兒」(第9行) と現われる．

---

(15) Hamilton 1986, Tome I, pp. 92, 103.

(16) 松川 1995, p. 111.

(17) Cleaves 1949, p. 95, n. 10.

(18) 『元史』明洪武刊本 (百衲本二十四史，臺湾商務印書館)，本紀24, 18b.

(19) 『元史』明洪武刊本 (百衲本二十四史，臺湾商務印書館)，志10, 38b-39a.

(20) Cleaves 1949, p. 97, n. 16 ; p. 117, n. 141 ; p. 121, n. 171. なお，クリーブスは「郎中」のウイグル字形を langǰung と転写するが，実際には L'NKCWNK と刻されている点に注意を喚起したい．14世紀前半の漢蒙対訳碑において，語中の č 音と ǰ 音を C 字と ǰ 字で書き分けるシステムは未だ確立されていない．

◆ v03 : qoo-čung

モンゴル語資料中には在証されていないが，本碑立石の背景からみて，漢語「和中」の音写に間違いない．同じ語が，r05 では XWCWK qoču(n)g と分かち書きされずに綴られている．「和中」は，和羅，中羅と同義語．古典漢語としてそれほどポピュラーではないが，本碑碑陽漢文中に3回（第7行，第13行，第19行）現われていることより，そのままモンゴル語に取り入れられたと思われる．元朝官吏のハンドブックとして有名な，徐元瑞（撰）『習吏幼學指南』には，「和中：物斛を以て官より投糶するを謂う」とある．(21)

◆ v04 : bii tas

「碑石」の意．漢語の「碑」と古代ウイグル語の taš「石」からなる．すでに漢蒙対訳碑 (3), l. 2 に在証済みであるが，(22) この混成語は，漢蒙対訳碑よりも成立の早いウイグル字ウイグル語碑文『重修文殊寺碑』(1326年) l. 21 にすでに見えているので，(23) ウイグル語からモンゴル語に入ったものと思われる．

6．碑陽 (recto) 漢文・モンゴル文テキスト

次頁は，ラドロフの拓影に基づいて筆者が著録した碑陽である（ただし碑額は提示していない）．もとより原碑に基づかないため，暫定案にすぎない．録文にあたっては，李文田の漢文録文とリゲティのモンゴル文録文をそれぞれ参照した．

碑陽 (recto) モンゴル文テキスト

r01	Y'K'Z	'WRD'-SWN
	yekes	ordas-un
	大	オルダの

(21) 楊訥（點校）『吏學指南（外三種）』浙江古籍出版社 1988年（元代史料叢刊），p. 121. なお，「和中」については碑陽漢文中にもその語義が説かれているので，歴史的研究は碑陽漢文の釈読とともに続稿で行なうこととする．

(22) Cleaves 1949, p. 93, n. 1.

(23) 耿世民・張寶璽 1986, p. 260.

嶺北省右丞郎中總管收糧記

河東古陶進士霍有孚撰　滕陽陶士宜刊　劉沙的監工
河東大鹵段起祖書　石工韓德
和寧路司吏　李褫瓛篆　都社長　張仲澤　賈仲□　高彥溫　助□

伏以
國之和糴以從權民之中糧以應募此經濟之嘉猷致治之急務也夫欲上不蠹國下不厲民者則惟在于委任得其人收受□□□□□□□恆□我
嶺北省治在藩垣朔漠不毛例設和中五十餘年洎至正丁亥咨准糧數一十五萬石於是監者上相光祿大夫平章政事□□□□□□□□□剌沙
中奉大夫參知政事蠻子亞相承直郎左右司員外伯加奴奉政大夫左右司都事郭氏從道等推選資政大夫右丞帖木□□□□□□□？吉？
史趙氏景文嘉議大夫和寧路總管木薩飛兒等董正其事秋毫無犯億石之糧月餘而畢可謂神矣矧我數君子者皆□□□□□□□？不剛不
柔之才居有為有守之地則其風彩閑雅外圓內方望之如霜之潔就之如日之春無虐煢獨而畏高明不屈威武而□□□□□□□□□不？
國而厲民惟奉公而愛物使豪強寢鉏鋙之形而不敢輕姦猾息跳梁之狀而不敢侮下逮百執事之人亦皆有□□□□□□□□□□□□而
價高下龠合無偏毫釐不繆書之臣為上為德為下為民詩之憲憲令德宜民宜人而不惟默契於心則又發揮□□□□□□□□□□□□亦不
吐周官所謂以公滅私民其充懷豈不信哉吁和中之名不見於經則其創制立法自我
元始然一代之興必有一代之制昔唐虞夏商治不過九州而有納總納銍納秸納粟納米之例周人地廣列為□□□□□□□□
國寖廣郡縣天下而有常平義倉之目彼魏晉之淆亂金宋之苟簡誠不足法也由是觀之歷代之天下未有如我
元之天下也歷代之制度未有如我
元之制度也以我
元之天下論我
元之制度極難者和中爾和者上之所節以詘民中者下之所精以報
國苟得其人天雨海流而不息神運鬼輸而不竭不得其人反是以
今無為之治得可用之人當纂之於經編之於史以幸萬世傳之不朽可也愚因北京道糧客裨□等允志于
國之忠澤民之願也哉時至正戊子秋八月朔日記　同立石人呂仲寬　劉良甫　劉孝先　曹彥亨　□□□

r02	'WM'K'Y	NYK-'WNK-WWN	M'D'LWN			KWYK'	P'L'X'SWN-'
	Ụmekei	Ning-ong-uun	medel-ün			Köke	balaγasun-a
	フメケイ	寧 王 の	支配の			クケ・バラガスン	に

S'XWXW	LWX-'-D'N	
saγuqu	luq-a-d̲an	
居る	?	たち

r03	SY CYNK	T'YβW	LYNKPWY	SYNKWN	YYW CYK	T'MWK'
	si-čing	daivu	Lingbui	šingun	yiu-čing	Temüge
	資政	大夫	嶺北	省の	右丞	テムゲ

r04	C'WL'	T'YβW	SWW YYW	SY-YYN	L'NKCWK	Y'NKKY
	čeule	daivu	soo-yiu-si-yin		langčung	J̌anggi
	朝列	大夫	左 右 司の		郎中	ジャンギ

r05	K' YY	T'YβW	XWW NYK	LWW-YYN	SWNKKWN	MWS'βYR	
	ge-yi	daivu	Qoo-ning	luu-yin	sunggon	Musavir	
	嘉 議	大夫	和 寧	路 の	総管	ムサヴィル	

NWY'N-D'N	SWNK	XWCWK	"MWWY	/WL'	"NK'-Y
noyan-d̲an	sung	qočung	amuui	[t]ula	?
ノヤンたちが	?	和中	糧 の ために		

'WYLWW	YW///	/////D'R///
ülüü	J̌o///	////dar///

語註

◆ r02 : Ụmekei Ning-ong

リゲティは Ụmekei čing-ong ('WM'K'Y CYNK 'WNK)と読んだが，ラドロフ拓影を仔細に検討しても，CYNK の冒頭は sadhe (C) 字に見えない．むしろこの語は，r05 : XWW NYK qoo-ning「和寧」の NYK とそっくりである．一方，r05 : XWW NYK qoo-ning「和寧」と読むことの正しさは，碑陽漢文第9行の「嘉議大夫和寧路總管木薩飛兒」との対応によって確認されるので，リゲティの CYNK は NYK と訂正できる．

ところで，ペリオ Pelliot とアムビス Hambis は，『聖武親征録』への訳註にお

いて，『モンゴル秘史』第152節に2回現われる形容詞「忽蔑該」*hümägäi*（傍訳は「臭」）が，『元史』巻29，泰定帝本紀に現われる右丞相「旭邁傑」のモンゴル語原語である可能性を指摘した.[24] 一方，これに先だって，屠寄は『蒙兀兒史記』において，泰定年間の右丞相旭邁傑と別人物として，『元史』巻43，順帝本紀6，至正13年(1353年)十二月己亥の条に，「寧王旭滅該」とあるのに注目し，寧王闊闊出 Kököčü の末裔に旭滅該を加えていた.[25]

寧王旭滅該は『元史』順帝本紀のこの条だけにしか現われないため，『元史』巻107宗室世系表への訳註を『蒙兀兒史記』に拠りつつ行なったペリオ・アムビスも，旭滅該の原語がモンゴル語フメゲイ *hümägäi* であることを示唆したのみで，宗室世系表の寧王闊闊出位，『元史』巻108諸王表の寧王の条ともに現われない寧王旭滅該については，屠寄の見解を引用するに止めたのであった.[26]

翻って，本処の 'WM'K'Y を Ụmekei と読み，『モンゴル秘史』や『元史』に漢字音写で現われる中期モンゴル語の *hümägäi* に対応させることは，綴り字の合致から問題ない（ウイグル字は中期モンゴル語の語頭の /h/- を表記しない）．次に，本処を Ụmekei Ning-ong と読むことによって，この人物が屠寄によって注目された「寧王旭滅該」と同一人物である可能性が高まる．最後に，問題の『元史』巻43，順帝本紀6，至正13年（1353年）十二月己亥の条における寧王旭滅該（フメケイ）に関する記述

寧王旭滅該（フメケイ），大斡耳朶（オルダス）思に還り，金繫腰一・鈔一千錠を賜う．

と，本碑 r01:「大オルダのフメケイ寧王の支配下の...」を勘案すれば，時代的には5年の差があるものの，モンゴリアにおいて大オルダを守るフメケイ寧王の実在が，相互に検証されうるのである．

---

(24) Pelliot et Hambis 1951, p. 243.

(25) 屠寄『蒙兀兒史記』巻76, 忽必烈汗諸子傳.（上海古籍出版社・上海書店(編)『元史二種』(二)，1989年，上海，p. 512.）

(26) Pelliot et Hambis 1945, p. 159.

おわりに

本稿の目的は，本碑の碑陰モンゴル文の解読を初めて公表することにあったが，最後に本碑立石に関わる歴史的背景について付言したい．

クビライ以降の大元ウルス諸カーンは，大都に遷都したのちもカラコルムをモンゴリアにおける要衝として重視し，アルタイ方面に出兵するときには必ずカラコルムを駐屯基地として，ここに穀物倉を設置した.(27)

順帝トゴンテムル治世 (1333-1370) 下，特に1340年代以後，黄河の氾濫などの天災によって大元ウルスの経済は大きな打撃を受けていた．嶺北カラコルム方面も例外ではなく，至正3年(1343)以降，平章政事鐵木児塔識 Temürtaš は，大規模な和糴を行ない，カラコルムに糧食を移送している．こうした流れのなかで，至正7年 (1347) に15萬石の和中糧 qoo-čung amu がカラコルムの穀物倉「和林倉」に移送された．本碑は，この和中糧納入の完遂をもって翌年の至正8年 (1348年) 8月に立石されたものである．

「和林倉」の存在については，本碑碑陰漢文の題名中に「和林倉　朝列大夫和林倉提舉　承直郎和林倉同提舉」とみえることから確認でき，李文田『和林金石錄』にも同様の碑陰題名を持った碑文が多く録されていることもその存在を裏付けているが，実態については今まで明らかにされていなかった．本碑を総合的に研究することによって，和林倉の実態，さらに，順帝トゴンテムル治下のモンゴリアの情勢，特にフメケイ寧王のカラコルムへの関与などの問題が解明されるであろう．

参照文献

Cleaves, F. W.

1949　"The Sino-Mongolian Inscription of 1362 in Memory of Prince Hindu." *HJAS* 12, pp. 1-133, +27 pls.

(27)　大元ウルス治下のカラコルムについては，岩佐 1936 参照.

1950 "The Sino-Mongolian Inscription of 1335 in Memory of Chang Ying-Jui." *HJAS* 13, pp. 1-131, +24 pls.

1951 "The Sino-Mongolian Inscription of 1338 in Memory of J̌igüntei." *HJAS* 14, pp. 1-104, +32 pls.

1952 "The Sino-Mongolian Inscription of 1346." *HJAS* 15, pp. 1-123, +12 pls.

1967 "The Sino-Mongolian Inscription of 1348." *HJAS* 27, pp. 76-102, +8 pls.

耿　世民・張　寶璽

1986 「元回鶻文《重修文殊寺碑》初釋」『考古学報』1986:2, pp. 253-263, +2 pls.

Hamilton, J. R.

1986 *Manuscrits ouïgours de IXe-Xe siècle de Touen-houang.* Paris.

岩佐　精一郎

1936 「元代の和林」 和田清（編）『岩佐精一郎遺稿』東京, pp. 233-252.

Котвичъ, Вл. Л.

1918 "Монгольскія надписи въ Эрдэни-дзу." *Сборникъ Музея Антропологіи и Этнографіи имени Петра Великого при Россійской Академіи Наукъ* vol. 5, pp. 205–214.

Ligeti, L.

1972 *Monuments préclassiques. 1. XIIIe et XVIe siècles.* Budapest. (Monumenta Linguae Mongolicae Collecta II)

松川　節

1995（評）「D. Cerensodnom & M. Taube 著 *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung.*」『東洋史研究』54:1, pp. 105-122.

森安　孝夫

1994 「ウイグル文書劄記（その四）」『内陸アジア言語の研究』9, pp. 63-93.

中村　淳・松川　節

1993 「新発現の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究』8, pp. 1-92, +8 pls.

Pelliot, P. et L. Hambis

1945 *Le chapitre CVII du Yuan Che: Les généalogies impérials mongoles dans l'histoire officielle de la dynastie mongole.* Leiden. (Supplement to *T'oung Pao*, 38, 1945.)

1951 *Histoire des campagnes de Gengis Khan: Cheng-wou ts'in-tcheng lou.* The Hague.

Поппе, Н. Н.

1929 "Отчет о поездке на Орхон летом 1926 года." *Предварительный отчет лингвистической экспедиции в северную Монголию за 1926 год.* Ленинград, pp. 1–25.

ポッペ (Poppe, N. N.)

1942 播磨楢吉（訳）「新たに発見の二記念碑」『北亜細亜学報』1, pp. 215-248.

Radloff, W.
1892-99 *Atlas der Altertümer der Mongolei.* St. Peterburg.

略号表

AOH : *Acta Orieitalia Academiae Scientiarum Hungaricae.*
HJAS : *Harvard Journal of Asiatic Studies.*